問題中の字数制限は、すべて句読点、記号等をふくみます。

一　各――――について、漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

(1)　落ち込んでいる友達をナグサめる。
(2)　イドの高い地域では白夜がみられる。
(3)　ヘイオン無事に過ごしている。
(4)　彼はタクみに攻撃をかわした。
(5)　雨が降らず川が干上がってしまった。

二　次の文章を読んで後の問に答えなさい。

ある一つの技術に着目してみれば、最初は「必要は発明の母」で出発する。こういうものがあれば便利なのに、という欲望が[注1]イノベーションに結びつくからだ。【　A　】、いったん技術開発に成功すると、とたんに「①発明は必要の母」に転化する。その最大の理由は、今持っているものにこんな機能があればもっと便利なのに、と消費者の欲望が拡大してゆくことにある。売る側においても、あたかも人々が求めていたかのようなふりをして次々と余分の機能を付加し、消費者の欲望を刺激するのに精を出す。これを受けて、消費者もそんな機能が必要だったと錯覚し、滅多に使いもしない機能がついた製品を買うのに②血眼（ちまなこ）になる。このような相乗作用の中で技術は「進化」するのだが、結果的には資源を浪費して異様なものを作り上げてしまうのである。――(ア)

【　B　】、わが家の電子レンジは、ごはん・おかず・解凍あたため・魚や肉の快速解凍の機能があるだけでなく、根菜と葉菜の加熱区分まであり、トーストが焼け、ケーキ作りもできることになっている。しかし、九〇パーセント以上はごはんとおかずをチンするだけであって、その他の機能は宝の持ち腐れである。ケーキなどは作ったことがなく、トーストは専用のトースターの方が速いしきれいに焼ける。そういう家庭が多いせいか、最近の電子レンジは暖め専用の単能型のものが増えている③そうだ。余分な機能がないだけ長持ちする利点もある。――(イ)

【　C　】、ケータイはどうなのだろうか。ポケベルから携帯電話が生まれたときは、基地局が少ないため強い電波を使わざるを得ず、嵩張（かさば）って重かった。しかし、いったん小型・軽量化の可能性が開かれると「進化」は急速であった。声の交換から始まり、写真撮影、GPSとの連結、メールやインターネット利用、音楽の取り込み、そして動画の取得までできるようになった。実に多くの機能を持つがほんの掌（てのひら）サイズであり、もはや携帯「電話」でなく、ケータイ（モバイル機器）になったのだ。ひたすら電子レンジと同じ多機能化の道を歩んでいるのが現状である。でも、やがて無駄な機能を削ってケータイ技術の見直しがあるのだろうか。

電子レンジは工業革命（エネルギー利用による物質の生産・調整・改質）の、いわばハードの製品だが、ケータイはもっぱらソフトを扱う情報革命で、同じ論理で扱うと間違うことになる。むろん、ケータイを片手で易々（やすやす）と操作する若者と、老眼鏡を外して両手を使わなければボタンが押せない高齢

者とでは使い方は異なっており、高齢者にとっては限られた相手との短い対話が主だから（電話代を気にした幼い頃の記憶が染みついているのである）、単能型の携帯電話でよい。実際、そのような端末が売り出され好評である。電子レンジと同じく、技術の一部見直しは行われているのだ。

しかし、情報という抽象的な存在は、どこにでも柔軟に入り込め、いつでも気軽に取り出せ、どうにでも料理できるという側面がある。人間の心理によくフィットするのだ。写真や動画やインターネットを見ていれば孤独感を感じないし、ただ宛（あて）もなしに書き付けたブログでも誰かに読んでもらえれば嬉（うれ）しい。ボタン操作一つで外界とつながることが楽しみの源泉である。個が分断化された現代において、ケータイは癒（いや）しの道具として欠かせなくなっているのだ。さらに将来においては、ケータイ一つで、お金の支払い、電車の乗り降り、身分証明、健康保険、運転免許、などの用が足りるようになるだろう。その意味では、ケータイの技術はさらに「進化」するに違いない。ケータイは人々の生き様や文明の質を変えることになるという予感がする。技術の見直しどころか、さらに広がっていくと想像されるのだ。では、それによって人間はどう変わるのだろうか。――(ウ)

④ケータイほどの影響力はなかったが似た話はある。腕時計である。懐中時計や腕時計が一般の人々に出回るようになったのはそう古いことではなく、一九〇〇年前後である。（日本では日露戦争の頃と言われている。）ゼンマイ・歯車・テンプなどの微細構造技術の発展によって、ようやく小型の狂わない時計が安く製作されるようになったのだ。その結果として、人々の時間への意識が格段に研ぎ澄まされるようになり、「遅刻」という概念が生み出された。人々に時間感覚が脳に刷り込まれるようになったのだ。数秒の狂いもなく時間精度を追求する日本人の体質は、実は［⑤］天的なものと言える。江戸時代の日本人は時間に鷹揚（注2おうよう）であったにも拘（かかわ）らず、二〇世紀に入ってからの技術の力が時間に敏感な日本人へと変貌（へんぼう）させたからだ。腕時計の技術が日本人を時間の狩人（かりゅうど）に仕立て上げたのである。

（池内了「科学の落とし穴」）

注1　イノベーション…新たな仕組みや習慣を取り入れて、革新をもたらすこと。
注2　鷹揚…ゆったりとして威厳があること。こせこせしないこと。

問一　【　A　】～【　C　】にあてはまる語として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　ところが　　イ　では　　ウ　例えば

問二　――①「発明は必要の母」について次のようにまとめるとき、各（　）にあてはまる二字の熟語を本文中から抜き出して答えなさい。

新しい技術がさらに消費者の（　1　）を喚起し、その機能が必要であると（　2　）させ、購買行動に走らせるということ。

問三　――②「血眼になる」の意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　切磋琢磨（せっさたくま）すること。
イ　一心不乱になること。
ウ　付和雷同すること。
エ　臨機応変に対応すること。

問四　――③「そうだ」と用法が同じものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　今にも泣き出しそうだ。
イ　明日は雪が降るそうだ。
ウ　とても悲しそうだ。
エ　机から本が落ちそうだ。

問五　――④「ケータイ～腕時計である」とあるが、ケータイと腕時計はどのような点で似ているのか。本文中の語句を用いて解答欄に合うように三十字以内で説明しなさい。

問六　⑤にあてはまる漢字一字を答えなさい。

問七　次の文は本文中の(ア)～(ウ)のどの部分にあてはめるのが最も適当か、記号で答えなさい。

いったん多機能に広がった技術は見直され、本当の必要に合ったものへと回帰するのかもしれない。

問八　本文の内容として適当なものには○、適当でないものには×を、それぞれ解答欄に記入しなさい。

ア　便利なものに対する消費者の欲求は際限がなく、高機能の製品が市場を独占している。
イ　高齢者と若者では、ケータイの操作の仕方が異なるため、それぞれに合ったケータイも販売されている。
ウ　ケータイは孤独感を和らげるツールであるために、逆に個の分断を促進してしまっている。
エ　江戸時代の日本人と、時計が普及した日露戦争以後の日本人とでは、時間に対する感覚が異なっている。

三　次の文章を読んで後の問に答えなさい。

稽古が終わったあと、一人で残って竹刀のささくれを修理していたら、先生に声をかけられた。

「早苗……お前、ほんと上手くなったよなぁ」

先生は、片手に鍵をジャラジャラさせている。[①]模様。

「ああ……ありがとう、ございます」

「一年で入ってきたときはなぁ、竹刀振り上げたら、そのまま後ろに転びそうだったのになぁ」

「先生。さすがにそこまで、ひどくはなかったはずです」

初心者だったのは事実だけど。

「でも、俺も初めてだったよ。日本舞踊から剣道に転向してきたって奴は」

「わたし的には、あんまり違和感なかったですけどね」

先生、苦笑い。

「……まあ、ここまで上達したってことは、その選択も、決して間違いではなかった、ってことなんだろうな」

上達、か。つまり、上に達する。実にいい言葉だ。

「でも、最初から動きを真似るのは上手かったよな。それは絶対、[②]のお陰だと思うよ」

「ええ。逆に、形はできてるのにって、散々いわれましたけど」

「そう、ほんと形だけだったからな……当時のお前の取り得は」

「……力、なかったですもんねぇ」

「竹刀、よく放り投げてたしな」

「あの天井の疵、私がつけました」

あれな、と指差し、先生は笑った。最初は怖い人だと思ってたけど、三年も付き合っていると、さすがにもう、そういう感じはない。

「……四月からは、あっちだな」

先生が、出入り口の向こうに目をやる。ここからは見えないが、その方角には高校女子部の総合体育棟がある。その中に、女子剣道部が使用する道場はある。

ちなみにここは、古い神社のお社[a]みたいな感じの独立した建物で、私はこの雰囲気がけっこう好きだった。本来は柔道部とか合気道部とかと共用の「武道場」なんだけど、中学女子部にはその二つともないので、っていうかだいぶ前に潰れちゃったらしいので、結果的に今は「剣道場」ってことになっている。

「お前なら、あっちでもやっていける。……続けるんだろう？」

私はいったん、[③]作業の手を止めた。

「はい、続けます。剣道、好きですから」

先生は、二度小さく頷いた。

「[④]けっこう、勝てるようになってきたしな」

それは、ちょっと違う。

「いや、たぶん私、勝てなくても、続けると思います。単純に……剣道が好きだから。剣道の動きとか、雰囲気とか、緊張感とか、匂いとか……そういうのが好きだから、なんかそういう感じに、浸ってたい、っていうか」

また、先生は笑った。

「つくづく変わった奴だな、お前は」

「そうですか？　ごく、普通の発想だと思いますけど」

私にしてみれば、逆になんでみんな、そんなに勝敗に拘るんだろう、っ

てことになる。剣道は勝敗を争う競技ではなく、心身の鍛錬と、精神と人格の修養が目的であるって、本にだって書いてある。

どっちかっていうと、⑤私の方が本道じゃない？　とすら思う。

《　A　》。

中学の卒業式って、全然泣けない。

そのまま付属高校に上がるだけの私たちは、別に友達と離れ離れになるわけじゃないし、通う場所が変わるわけでもない。中学と高校じゃ校舎すら隣合わせで、教室の窓から見える風景にもほとんど変化はない。セントラルホールで「仰げば尊し」と校歌を唄って、お終い。

でも、高校の入学式は違う。

中学で四つだったクラスが、高校では五つに増える。つまり、ちょうどひとクラス分、新しく入ってくる生徒がいるってわけだ。

そして迎えた、入学式の日。

私はお姉ちゃんと初めて一緒に、高校女子部の校舎に入った。

「ねえねえ、やっぱ高校から入ってくる子たちって、違う感じするの？」

「そりゃね。推薦なり一般入試なりに通るんだから、キホン頭いい人が多いし、スポーツ推薦なら、その道でそれなりの成績収めてるわけでしょ。逆になんも取り得のない人って、あんまりいないんじゃない？　たとえば、あんたみたいなのは……じゃ、あたしこっちだから」

お姉ちゃんとは二階で別れた。入り口で確認したところ、私の入った一年B組は三階になるらしい。

「よっ、早苗」

「あぁ、麻奈おはよ」

知った顔と合流しながら、私はなんの気なしに階段の先を見上げた。すると、妙なものが、前方上空を、立ったまま移動していくのが目に入った。

黒い、竹刀袋――。

剣道部の先輩だろうか。二年生なら、クラスのいくつかは三階にある。でも、先輩なら、竹刀は普通、道場に置きっぱにしているはず。新しいのを買ったとか、何か事情があるにしても、わざわざ入学式の日には持ってこないと思う

じゃあなに、新入生？　《　B　》。

いくら気合いが入ってるにしても、入学式の日に部活がないのは常識で分かりそうなもんだし、見たところ防具袋はなさそうだから、稽古っていったって、できるのはせいぜい素振り止まりってことになる。それだったら家でやれば？　って話だ。

《　C　》。

「ちょっとごめん」

私は友達に片手で詫び、前の人たちを追い抜いて⑥竹刀袋を追いかけた。

三階に着いたそれは、一年C組の教室に入っていく。なんと、お隣さんってわけだ。っていうか、その竹刀袋には何か絵が描いてあった。あれってもしかして、般若？

心臓が、試合のときよりバクついていた。

すっごい顔見たい。できれば挨拶とかしてみたい。《　D　》。なんたって竹刀袋、般若だし。

声をかけるとしたら、やっぱ「剣道やるの？」とかだろうか。いや、それは駄目だ。やるに決まってんだろがー、とか返されたらヘコむ。なんたって相手は般若だし。《　E　》。できれば今すぐ。こんな気持ちのままじゃ、入

学式になんて出られない。
ああ、どうしょう。
なんかソワソワしすぎて、頭が変になりそう。
なんてったって、竹刀袋に般若ですから。

（誉田哲也「武士道シックスティーン」）

問一 ① にあてはまる語句として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 強く「はよ帰れ」サインを出している
イ うすく「はよ帰れ」サインを出している
ウ 「はよ帰れ」サインを出したくない
エ 「はよ帰れ」サインはなかなか出せない

問二 ② にあてはまる言葉を五字以内で本文中から抜き出して答えなさい。

問三 ═══ a「ちなみに」・b「それなりの」の意味として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

a

ア 詳しく言うと　イ わかりやすく言うと
ウ ついでに言うと　エ 言い換えると

b

ア ある程度の　イ 非常にすぐれた
ウ 名が売れるほどの　エ 周囲がほめたたえる

問四 ═══ ③「作業」とあるが、どのような作業か、十五字以内で答えなさい。

問五 ═══ ④「それは、ちょっと違う」とはどういうことか、具体的に四十字以内で説明しなさい。

問六 ═══ ⑤「私の方が本道じゃない?」に込められた思いとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 剣道は勝敗を争う競技ではないと本にも書いてあるし、勝敗に拘りすぎるのはおかしい。
イ 剣道は勝敗を争う競技ではないと本にも書いてあるのに、勝敗に拘らない私がおかしいのだろうか。
ウ 剣道は勝敗を争う競技ではないと本にも書いてあるし、絶対に勝敗に拘ってはいけないものだ。
エ 剣道は勝敗を争う競技ではないと本にも書いてあるのに、精神修養をなまけるのはおかしい。

問七　――⑥「竹刀袋を追いかけた」と同じ比喩表現が使われているものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　彼はまるできつねのようにずるがしこい性格だ。
イ　彼は草原をとおる道をスタスタと歩いて行った。
ウ　十五夜の丸い明るい月が私に語りかける。
エ　黒めがねが横から手を出してかばんを奪った。

問八　《　A　》～《　E　》にあてはまる文として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。同じ記号は繰り返し使わないこと。

ア　それにしたって変だ
イ　でも、異様に気になる
ウ　でも、なんとかしたい
エ　でも、なんか怖い
オ　まあ、わざわざ口には出さないけど

四　次の文章を読んで後の問に答えなさい。

今は昔、天文博士安倍晴明といふ陰陽師[注1]ありけり。①古にも恥ぢずやむごとなかりける者なり。幼の時、賀茂忠行といひける陰陽師にしたがひて昼夜この道を習ひけるに、いささかも心もとなきことなかりける。

[注2]しかるに、晴明若かりける時、師の忠行が下渡[注3]に夜行に行きける供に、歩にして車の後ろに行きける。

忠行車の内にしてよく寝入りにけるに、晴明見けるに、a えもいはず怖ろしき鬼ども車の前に向かひて来けり。晴明これを見て驚きて、車の後ろに走り寄りて、忠行を起こして告げければ、その時にぞ忠行驚きて覚めて、[　②　]の来るを見て、術法を以てたちまちに我が身をも恐れなく、③供の者どもをも隠し、平らかに過ぎにける。その後、④忠行、晴明を去り難く思ひて、この道を教ふること瓶の水をうつすがごとし。⑤しかれば、つひに晴明この道につきて、公私 b につかはれていとやむごとなかりけり。

（「今昔物語集」）

注1　陰陽師……奈良・平安時代以降に実在した官職で、方位学と天文学による占いを行った。
注2　しかるに……ところで
注3　下渡に夜行に行きける……夜に都の南方に出かけた

問一　――①「古にも～なかりける者なり」の現代語訳として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　昔のことを全て知っている不思議な者であった。
イ　昔のことは知らないが、腕の立つ者であった。
ウ　昔の人にもひけをとらないすぐれた者であった。
エ　昔の人に対抗心がある負けん気の強い者であった。

問二　――a「えもいはず」・b「やむごとなかりけり」をそれぞれ現代仮名づかいに直しなさい。

問三　②にあてはまる語を三字以内で答えなさい。

問四　――③「供の者どもをも隠し」の主語を漢字二字で答えなさい。

問五　――④「忠行、晴明を～うつすがごとし」の理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　晴明は鬼を恐れるなど、気が小さいが、真面目で裏切ることはないとわかったから。
イ　晴明は鬼が見えても全く恐れず立ち向かおうとするなど勇気があるとわかったから。
ウ　晴明には鬼が見え、機転をきかしたふるまいができるなど、陰陽師としての素質を感じたから。
エ　晴明には鬼が見え、鬼を退散させる力があるとわかったから。

問六　――⑤「しかれば」の意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　しかられたので　　イ　しかしながら
ウ　そうであるので　　エ　たとえていえば